

木屋瀬祇園の由来
 木屋瀬は 往古より女界灘と洞海湾へと通じる筑豊の大河・遠賀川水利交通の要衝として開け、中世・室町時代の頃には 勘合貿易で隆盛を極めた西国の守護大名・大内政弘の守護代・陶弘詮の館が置かれ、又 宗祇来訪などの事跡から 遠賀川河口・芦屋湊を経る海外交易をも含む水上・陸上とも地勢的要地としての繁栄ぶりが推察されます。

江戸・徳川の時代には 参勤交代制度や鎖国による唯一の開港・長崎出島とを結ぶ為の整備された長崎街道と赤間街道との追分宿驛として郡内随一の賑わいがあったと伝えられ 明治維新後は 筑豊炭田の石炭輸送を担った「川平駄」の集結地として 又 石炭景気に湧く商用地として更に賑わいました。其の後 石炭産業の衰退と

夏だ!! 祭りだあ!!

7月10日・11日 奉納 21時 宮入り

木屋瀬祇園だあ

寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会広報部会
 北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
 TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

運命を共にしていた処 近年では道路網整備・筑豊電鉄の敷設により北九州市の郊外型住宅地として序々に人口増加を辿っています。このような歴史をもつ木屋瀬の「祇園」とは、其も「祇園社」(須賀神社)が創建されたのは室町時代の永享年間(一四一九年〜一四四一年)大内氏の治世下と伝えられ、祇園祭事については「祇園祭日に親族知己来往して親交を温む 宮日と同じく古来の風習なり 木屋瀬祇園は地方最大の祭典にして毎年古式として山笠の行事あり 昔寛永以前より明治初年に至る迄は岩山造りにて高さ三丈余もありて量重く 他村の壮丁の加勢を受け盛んに昇りたりしが、其の後 屋台造りとなり 大正三、四年頃の電燈線の架設以来 高さ一丈三尺位のものとなる等 造り方は数度変更せらるるも 山笠は古より祇園祭の定義に「歴史的文化財産」(heritage)とされています。

「木屋瀬の風景」写真コンテスト 前 期 入選おめでとうございます

前期応募総数90作品
 入選作品は木屋瀬宿記念館のPRに活用させていただきます。
 多数のご応募ありがとうございました。(敬称略)

審査委員長 西尾 彪

写真の基礎であり、色味や影の悪影響は少なかったよう。限られた場所、見馴れた風景で、被写体として撮り方が難しいよう。新鮮味を出すために脇役として人物を上手に入れたり、季節感や、光と影などの時間帯を考慮してテーマを強調されるように工夫されて下さい。

審査委員 三浦 政人(八幡東区) 三浦 政人(八幡東区) 三浦 政人(八幡東区) 平野 森栄(遠賀町) 中島 孝(小倉南区) 中島 孝(小倉南区) 安延 孝(田川市) 中村 豊(八幡西区) 大内田康次(稲築町) 大内田康次(稲築町) 大内田康次(稲築町) 馬場 辰雄(門司区) 中賢一郎(八幡東区) 中賢一郎(八幡東区) 中賢一郎(八幡東区) 末延武司(宮田町) 末延武司(宮田町) 末延武司(宮田町) 中 経子(八幡西区) 中 経子(八幡西区) 中 経子(八幡西区) 亀田 寛昭(戸畑区) 今井 昭男(戸畑区) 今井 昭男(戸畑区) 長野 誠一(八幡西区)

「木屋瀬の風景」写真コンテスト(後期)作品募集中!!
 ■応募内容及び方法
 テーマ: 木屋瀬の町並みまつり、

「各賞表彰内容」
 前・後期の入選写真各20作品には賞金三千元、及び副賞として木屋瀬宿オリジナル図書カード千円分を差し上げます。見事入選された写真の中から以下の各賞を表彰致します。金賞(一作品):賞金三万円、及び副賞として北九州市観光協会賞(トロフィー、記念品)。銀賞(二作品):賞金二万円、及び副賞として北九州コンベンションビュロー賞(トロフィー、記念品)。銅賞(三作品):賞金一万円、及び副賞としてニコン賞(トロフィー、記念品)。

審査結果発表
 後期中選作品の発表は、平成16年12月中旬。三賞の発表は17年1月初旬。

※詳しくは、木屋瀬宿記念館 TEL(093)六一九一〜一九九までお問い合わせ下さい。

主催 北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館 同運営協議会 協賛(社)北九州市観光協会、(財)北九州コンベンションビュロー、ニコン(株)、筑豊電気鉄道(株)、凸版印刷(株)。

総会報告及び新役員紹介

平成16年4月22日(木)こやのせ座におきまして、第4回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会が開かれました。平成15年度事業報告・決算報告・平成16年度事業計画案・予算案、役員人事が議案として審議され、すべて承認されました。新しい運営協議会の役員は次のとおり選任されました。

理事長---高宮 歳 嗣
 副理事長---水上 裕 (郷土史料館運営部会長兼務)
 運営事務局長---米 永 博 實
 広報部会長---本 松 達 也 (平成16年5月24日死去)
 広報部会理事---千々和 裕
 郷土史料館運営部会理事---藤 本 隆 雄
 こやのせ座運営部会長---柴 田 泰 助
 こやのせ座運営部会理事---今 川 勝 則
 監 事---松 尾 徳 康
 監 事---松 尾 千代子

※尚、亡くなられました本松達也さんの後任に、宿場踊り保存会新会長の高崎尚康さんが広報部会長として新理事に就任致します。

木屋瀬宿記念館の利用状況

平成13年1月1日に開館して以来、多くの人に利用され、愛されています。

平成15年4月~平成16年3月までの利用状況は以下のとおりです。(単位:人)

| 月 | みちの郷土史料館 | こやのせ座 | 10月 | 1,099 | 975 |
|---------|----------|-------|---------|--------|-------|
| 平成15年4月 | 531 | 730 | 11月 | 1,145 | 863 |
| 5月 | 908 | 1,049 | 12月 | 341 | 1,107 |
| 6月 | 368 | 458 | 平成16年1月 | 551 | 399 |
| 7月 | 1,663 | 807 | 2月 | 830 | 316 |
| 8月 | 4,782 | 1,316 | 3月 | 1,075 | 1,234 |
| 9月 | 628 | 572 | 合計 | 13,921 | 9,826 |

今後も、楽しく面白い企画を予定しております。皆様お誘い合わせの上ご来館下さい。

おかげさまで大盛況でした 世界びっくりそろばん展!!

平成16年4月24日(土)~5月30日(日)まで、みちの郷土史料館において、企画展「世界びっくりそろばん展」が開催されました。そろばんの教育普及に尽力されている古賀茂道先生(中間市在住)が所蔵する、世界各地の珍しいそろばんやユニークなそろばん約400点を借用し、一堂に展示しました。新聞・テレビ・ラジオに広く取り上げられたおかげで、会場は老若男女にあふれ、期間中の中場入場者は、何と約1500人と大盛況でした。ご来館ありがとうございました。

「木屋瀬宿」催しの案内

みちの郷土史料館 第1回「木屋瀬の風景」写真コンテスト前期作品展
 コンテストの入選作品を中心に、応募作品を展示します。木屋瀬の四季折々の風景をお楽しみください。
 入館料 一般200円 高校生100円 小中学生 50円
 休館日 月曜日 期間 7月10日(土)~8月15日(日) 時間 9:00~17:30 (入館は17:00まで)

こやのせ座 木屋瀬祇園宿場祭協賛事業
 木屋瀬祇園宿場祭のビデオ上映、写真展を開催します。
 入館料 無料 休館日 月曜日 日時 7月10日(土)・11日(日) 10:00~18:00 木屋瀬祇園宿場祭のビデオの上映時間は約15分です。

訃報 本松達也さん (もとまつ たつや)

筑前木屋瀬宿場踊り保存会会長・木屋瀬宿記念館運営協議会広報部会長) 5月24日死去。70才。

本松達也さん(もとまつ たつや) 柴田 由美子

宿場踊りの輪の中で、ひととき目を引いていたのが本松さんでした。手・足・体を巧みに動かして思案橋の七手を踊られる姿を、目を凝らして見ていたことを思い出します。そして、「やっぱり宿場踊りはいいなあ。絵になるなあ」と納得したものでした。木屋瀬に生まれ育った私の中では、夏の祇園、盆踊りには欠かせない本松さんの姿でした。私の父とは、いつも宿場踊りの後継者を育てなればという事で思案苦勞されてきました。この長年の御尽力が今日、子ども達や若い人達に伝わり、浸透していつていっているところでは、私も父と本松さんの後押しで保存会に参加させて頂いた一人です。まだまだ未熟な三味線を先人の方達のテープを聴きながら練習して、少しでも近づこうとしているところです。

盆踊りの時、初盆の家々を歩きながら本松さんから気軽に声を掛けて頂き、昔の宿場踊りの話を聞かせてもらいました。時には、道行き三味線を口ずさみながら、「こやのせ座」で弾きながら移動しようとしたと、「こやのせ座」と木屋瀬宿場祭の話はとも楽しいものでした。

そして、終わった後は必ず「ありがとう。お疲れさま。」と笑顔で一人一人に声をかけて下さいました。その温かい言葉に「もっと頑張らねば」と思ったものです。

どこで逢っても必ず笑顔で言葉を交わして頂き、その優しい人柄に触れる度にホッとした気持ちになりました。

本日に今までの人生がございました。そしてお疲れさまでした。これからは、私達を見守っていて下さい。

ご冥福をお祈り致します。

明治初期までの日本は、川のない所は栄えていないと、歴史は語っている。

加茂川桂川の京都、淀川天満川の大坂、利根川荒川の東京、これ等を見ても川を重要な水の供給源とし、交通運輸その他に利用して大きく発展している。又、施政者達も川を多分に利用し、川を強力な砦とし水利を活かした都を構成している。大阪と秀吉、東京と家康、城も都も川に大きく助けられている。

遠賀川も又至る所に集落を造り、その営みを助け無限大の恵みと文化を生みながらも、今も尚旺んに、百万の人達が暮れ北九州の産業の中に、生活の中に滔々として流れ込み強力を原動力となつてゐる。

神武天皇の御乗船は芦屋の岡の湊より木屋瀬付近まで上られたと聞く。

辨阿上人は五重の塔の用材を木屋瀬裏の川浜に引き上げ、多くの木取り作業小屋を設けたと言われている。こうした事から考えると遠賀川の大型船の上限は木屋瀬付近だったと思われる。

平安時代遠賀川には平駄船と言ふ通い船があった。遠賀川流域は太宰府観世音寺の施入地で平駄船は砂や木材や雑貨等を太宰府に送る寄進専用船であった。彦山川と嘉麻川の流れに犬鳴川の流れが相合する所に位置した木屋瀬は、遠賀川文化の発祥の地として川筋の都となつた。

遠賀川と木屋瀬



わたしの昔話

近世五平太船とよぶ石炭運搬船が七千隻もいたと言ふ遠賀川は、何と言つても川船船頭衆の男の力が躍動する大舞台であった。そして若い船頭さん達の、意気と熱気の営みの中からは、きりした川筋が頭を擡げた。本町裏に船着場があった。商品や荷物の積み下ろしをしていた。若松や芦屋より産物を積んだ商船も来て人だかりの市場となつた。

魚を釣る人、貝を採る人も沢山いた。

娘達の社交場のごとく賑やかな洗濯場もあつた。岸辺に砂浜に浅瀬に、こうした人々の多彩な姿が点在し美しい風情を醸し出してゐた。

お嫁に行くのもここから船で、お嫁に来たのもここから船で、思い出さぬ川である。

摘み草の頃から、すすきに尾花が咲く頃までの川は、町中の子供達を多く集め、遊ばせ、強い元気な子に育てる木屋瀬の人々の楽園であつた。

草野原のような洪水堤のまん中を、流れ行くさざ波の上には、岸の柳と渡し小船の影があつた。木屋瀬泊りの船が次々その数を増し、夕映えの中に、せつせつと苦を張りめぐらして灯し、木屋瀬大河の夜を迎えていた。

大河悠々 暮れおだやかな柳かな

柴田豊廣遺稿集より

第三回 木屋瀬芸術祭 盛大に終わる

五月一日～五日

木屋瀬宿記念館運営協議会では、去る五月一日～五日にかけて第三回木屋瀬芸術祭を開催致しました。内容は、一日に前夜祭(軽音楽とダンスの夕べ)、二日に「ザ・フライング・エレファント」ライブ・コンサート、三日は映画上映会(朋の時間)母たちの季節、四日午前中は記念講演「筑前木屋瀬八幡伝説」伊藤小左衛門 其の参(午後には「長崎街道筑前六宿シンポジウム」オンラインワンをめぐりつくり)そして五日には「第一回筑前郷土芸能連絡会議」その他、「町並みスケッチ大会」「バザー」が、ここのせ運営部会の自主的企画運営で行われ、「宿場市」や「抹茶席」・「阿部王樹忌記念吟遊会」なども協賛戴き、千人を有に越えの方々が木屋瀬芸術祭に訪れ、或いは参加し、当に「ここのせ」舞台上の扇額に有るが如く、昔宿場の木屋瀬にて、多に遊び・学び・親睦と連携を深める有意義な連休を過ごせたかと思つ次第です。

つきましては、今後も木屋瀬芸術祭を、より意義有る行事へと推し進める所存でございますので、ご理解・ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

尚、ここのせ運営部会では、ここのせの運営に、より多くの方々にご参入戴きたく年齢・性別・性格を問わず、ここのせ座ポランティヤを常時受け付けています。ご興味のある方はご遠慮なく運営協議会事務局までお問合せ下さい。重ねてお願い申し上げます。

ここのせ運営部長 柴田泰助

十一月(ひもつき)

もつきはナンイモないナ

- 煮メ・にわとり・ごぼう・こんにやく・れんこん・かいも・にいじん・しょうが
- 吸物・魚・まつたけ・青菜
- あん餅
- お神酒に菊の花を挿す。

十月(かんづき)

- くりめいげんち(旧九月十三日)
- くりごせん
- おひら・はんべん・こんにやく・青味
- だいごなます
- 栗と枝豆をいがいち一升マスに山盛り入れち、お月さまに上ぐる。この日から、ごせんはオヒツにおつる。
- くんち(二十八日・二十九日)
- 柿の葉ずし・新米・こんにやく・かんぴょう・ごぼう・まつたけ・にいじん・鯛の浜やき(熱いうちに、むすんち、柿の葉につつまみ、すし桶に入れち重石をかくる)
- 煮メ・にわとり・ごぼう・こんにやく・れんこん・かいも・にいじん・しょうが

筑前木屋瀬

故岩尾四十三郎氏著書「ひろき屋」より掲載

お茶のどろどろ(そのち)

十二月(ひはす)

- 魚べす(三日)
- ごり・大根・寒餅(うろこもわたも取らぬこと)を酒しほと生醤油で煮る(大根葉も入るること)
- おひら・はんべん・れんこん・かいも・こんにやく・ごぼう・にいじん・青菜
- 味噌汁・豆腐・はんべん(どつちも賽の目に切る)・にいじん・菜のみ
- なます・大根・にいじん・削りカツオ
- 小豆ごせん
- お箸は柳の両細
- 神前のお供へはこの外に
- 活かし餅
- 掛鯛
- サザエのオスメス
- お鏡
- とうち(二十日すぎ)
- 冬至とう夜
- ぼうぶら煮メ(中風が出らぬため)
- かづめたい(こんに(三十一日)
- 夜
- なます・大根・削りカツオ
- すめの汁・鯨(天けなもんをたぶること)
- 鹿の爪大根(銀杏舎切り)
- 白ごせん
- お箸は栗あいはし
- うんそば(三十一日)
- 夜おそく、いたたく(来年、マシなように)

十一月(ひもつき)

もつきはナンイモないナ

- 煮メ・にわとり・ごぼう・こんにやく・れんこん・かいも・にいじん・しょうが
- 吸物・魚・まつたけ・青菜
- あん餅
- お神酒に菊の花を挿す。

十月(かんづき)

- くりめいげんち(旧九月十三日)
- くりごせん
- おひら・はんべん・こんにやく・青味
- だいごなます
- 栗と枝豆をいがいち一升マスに山盛り入れち、お月さまに上ぐる。この日から、ごせんはオヒツにおつる。
- くんち(二十八日・二十九日)
- 柿の葉ずし・新米・こんにやく・かんぴょう・ごぼう・まつたけ・にいじん・鯛の浜やき(熱いうちに、むすんち、柿の葉につつまみ、すし桶に入れち重石をかくる)
- 煮メ・にわとり・ごぼう・こんにやく・れんこん・かいも・にいじん・しょうが

筑前木屋瀬

故岩尾四十三郎氏著書「ひろき屋」より掲載

お茶のどろどろ(そのち)

十二月(ひはす)

- 魚べす(三日)
- ごり・大根・寒餅(うろこもわたも取らぬこと)を酒しほと生醤油で煮る(大根葉も入るること)
- おひら・はんべん・れんこん・かいも・こんにやく・ごぼう・にいじん・青菜
- 味噌汁・豆腐・はんべん(どつちも賽の目に切る)・にいじん・菜のみ
- なます・大根・にいじん・削りカツオ
- 小豆ごせん
- お箸は柳の両細
- 神前のお供へはこの外に
- 活かし餅
- 掛鯛
- サザエのオスメス
- お鏡
- とうち(二十日すぎ)
- 冬至とう夜
- ぼうぶら煮メ(中風が出らぬため)
- かづめたい(こんに(三十一日)
- 夜
- なます・大根・削りカツオ
- すめの汁・鯨(天けなもんをたぶること)
- 鹿の爪大根(銀杏舎切り)
- 白ごせん
- お箸は栗あいはし
- うんそば(三十一日)
- 夜おそく、いたたく(来年、マシなように)

筑前木屋瀬宿 寺めぐり 第一回 西元寺

木屋瀬を飢餓から救った 梅本弥次兵衛



「浄土真宗本願寺派 西元寺」寺号を白髪山と号す。現在の住居表示では、木屋瀬三丁目十二番二十七号ですが、昔から祇園町と呼んでいる地域にあります。祇園という地名は京都が有名ですが、祇園の由来は、お釈迦様が弟子達に教えを説かれた古代インドの僧坊の名前です。西元寺は、天正十年(一五八二年)本山十一世顕如上人から本尊を賜り、寛永元年(一六二四年)仏殿を創立して、西元寺と称するようになりまし。

現在の本堂は、四度目の再建で文久元年(一八六一)の建設で、天井に上棟式の墨書銘を残し欄間の彫刻には、元治元年(一八六四年)の墨書銘があります。山門は安永七年(一七七八年)、山門両脇の石塀は嘉永六年(一八五三年)の建設で、江戸時代の本格的寺院建築で木屋瀬の貴重な歴史的遺産の建造物です。

山門は当時の大財閥であつた、高崎家(柏屋カネタマ)の寄進です。本堂の襖に描かれてゐる松竹梅は、江戸期の木屋瀬の絵師、麻生東谷が描いたものです。また内陣には、享保の大飢饉で木屋瀬の住民を救つた梅本弥次兵衛の肖像が安置されています。

弥次兵衛は享保の大飢饉に接し、この木屋瀬の宿からは一人として餓死者を出さないことを深く心に誓い大奮闘して食料の調達にあたり、木屋瀬の住民を飢餓から救いました。

この大飢饉は福岡藩では、一説では七万人以上の餓死者が出たと伝えられています。この大飢饉は五月からの、長梅雨とイナゴの異常発生が原因でした。木屋瀬は弥次兵衛を先頭に

て、住民の知恵と財力と人材を活かし一致団結して助け合つて、この未曾有の危機を乗り越えました。お陰で一人として木屋瀬からは、餓死者がでませんでした。この事は、他の地域から見れば、驚愕的なことでした。この功績は福岡藩の記録書「黒田家譜」にも記載されています。

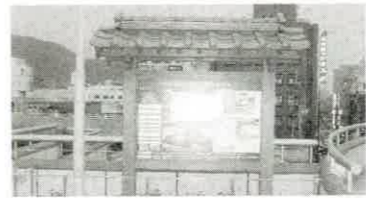
弥次兵衛は日頃から大変信仰心が厚く、その信心から出た善行であつたのでありますが、梅本家が水運との関係があつたことから推測すると、各地から命がけで食料を調達したものと想像されます。後の人々がその感謝の気持ちを木像として残り西元寺に安置しました。仏教の教えに、「遠く宿縁を喜べ」とありま

「宿」とは、過去と今を意味する。このようなるかな過去の縁や先祖によつて、今の私が在り木屋瀬が在るのである。今、生きてゐることも、私一人で生きてゐるのではなく、皆さんの「縁」によつて今の私が在るのである。そしてまた、今の木屋瀬の伝統や歴史も未来に引き継がれて行かなければなりません。この様な事を考えながら、寺の山門の前を通るとき、思わず手を合わせずにはおれない今日この頃です。

朝顔や胸に仏のおわします

本町 野口靖彦 合掌

木屋瀬宿記念館の案内板 黒崎駅に誕生!!



記念館の案内板が、3月に黒崎駅前のペデストリアンデッキ上に完成しました。設置場所は、駅舎を出て右前方の花壇内にあります。瓦屋根の行状、写真などが載っています。そして、道行く人への木屋瀬のPRに役立っています。ぜひ、お立ち寄りください。

学問の神様 扇天満宮祭・学神祭

新一年生健やかに育つてほしい!

五月二十三日、木屋瀬の伝統行事であります「扇天満宮祭」学神祭が執り行われ、運動会と重なりましたが、予定通り十四時より、新一年生全員参加で学神祭が行なわれました。

今年の新年生は例年になく多く二十八名で「学問の神様」菅原道真公にあやかり「うし」の字を毛筆で書き神様に奉納、掲示しました。祭典には多数の父母の参加があり、新一年生はそろいのハッピを着て神殿にかしこまり、神妙に拍手をうつ姿は、誠にほ、えましく、健やかに育つてほしいと、心から祈りました。

式典終了後、末松宮司より、

激励の言葉を頂き、境内に記念植樹をして学神祭をとおこりなく終了しました。

午後七時より、祭例が執行され、祭例後の直会では、料理を囲んで、子供達の将来の事や、木屋瀬の伝統文化、祭事など話はずみ、時間経過を忘れる程でした。

このようにして、今年も皆様方のお陰で、無事扇天満宮祭、学神祭を終えることが出来ました。本年度の当番町は中町町内会でした。(香月英輝)